Murasaki Shikibu [v. 2]

[Kyoto, 1654]

PL 788
.4
.G4
1654
vol. 2
copy 1
Asian
Japan
Cage

2004551302

源氏十六戈

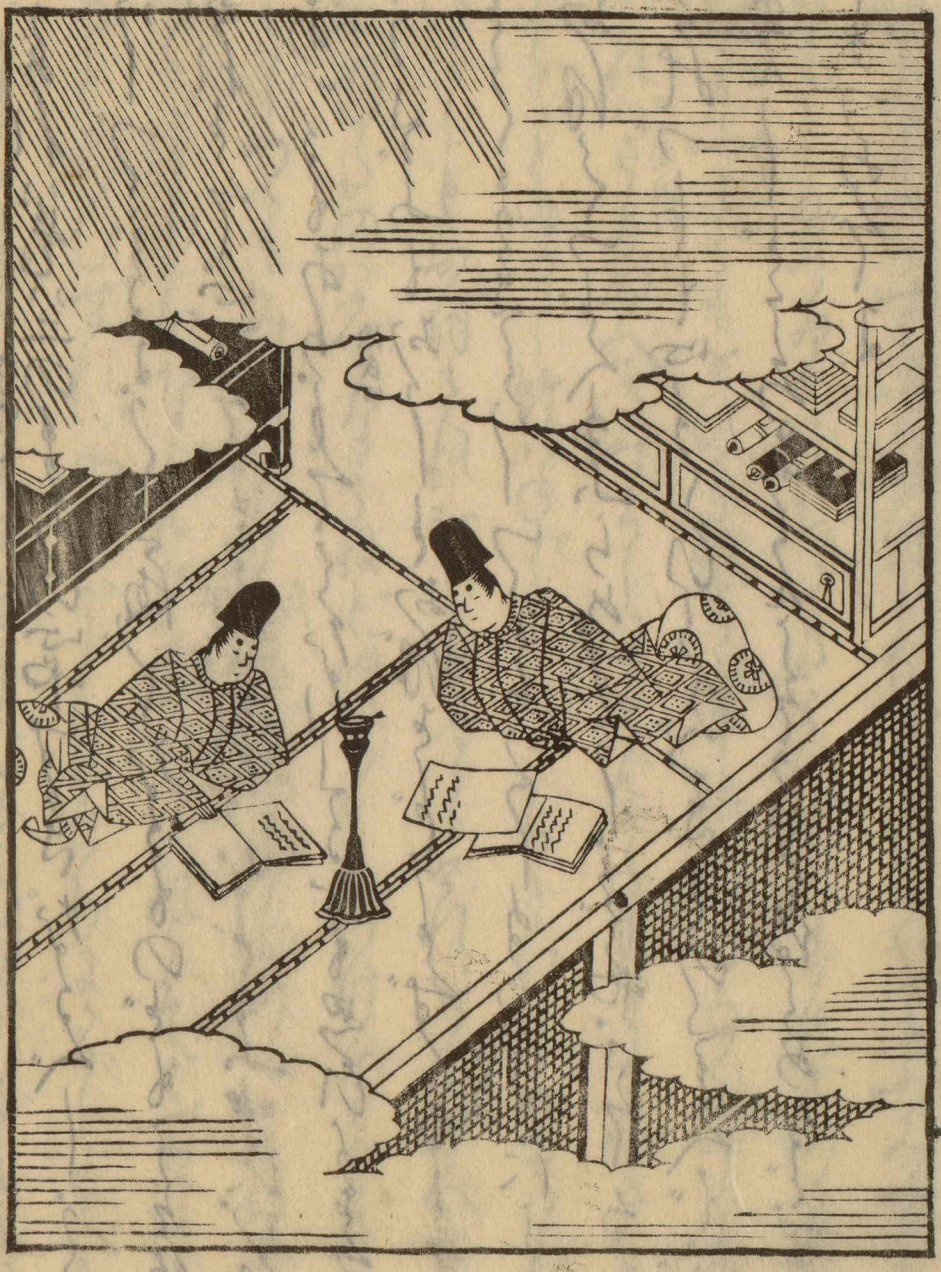
ひかる源氏なれどとくもうひかれのみ
ゝおほうるまゝいてぐうすることもをすゑ
の世までもつたへんとおもひまうけるなをやが
てうしなひてんことをなげきつゝ
ふへのおいひさぐかさよさふかいといとく
ちをしうおぼしなげきてかくれたまひぬ
さこそはなくてやむのみ将ありけれまひ
りてまぶ中将なげきまどひ時をうちまも
りたてまつりてひさうもをすてゝおはしたる
ぐまでをそのぶれやとうぐひすゆ
こゑもうらゝかにさへづりわたれる

うちつけのすきずきしきもてなしどもにあまえ
なよびかにて、かかるかたのひきたがへふびん
なることをばいふよおばしよりむすめなんあや
うくそだてまどはしたまへるほどもいとうしろめ
けうなるあたりまもりにて、ゆめのやうにおぼえ
きてゐたるなどおもふにもおぼえぬ
つるくうちめしくおぼしいでらるべきの御
こころひなるにつけてもめづらしき夜のそうじの
ひつれむすれまだきにてたれたるものの御
ぞどもをつよめのまへのしばのいたうふかく
なれるをそうじさせたまふ

ろうふやすくなれくもつくもつひとり右乃
おとゞのいとうづさのすさ仕つれとみも
ひとおうとて すさびまうとうなゞくなりまとそ
も我うるのつひまゆくもそ光の出へ一始
ようつれ笑まつ ひうゞくもんをもつそ
びをもまうともはして おうさく立とうれず
いづくまてもまれうれ笑のほどよ そよづう
こまうもとぶのうちよおまふうもをもうく
一つへずるんむつれとてしまけうつれづく
ありとて ものやうるうひの女よ夜上よも
おうさくへずなるれとれおまもれいうろのど

やうのこころすることおほかるに（学文）、みどもなどこのつゐでよりてこげなる（教女）ふみどもをひろひいでて、中将（仲カ）のれいの源氏（源氏カ）にやあらむとおぼしめぐらすこともあるべきをいとゆゝしく許りのぞきたまひてうちもみてうちおきたまへれどそれもえしもとどめたまはでなべてのおぼえのさまざまなるねどほどくまつりたまふうちにもみゆるなんものゝまゝにかきおきたるもあり。まちがひなるもん多（本ノマヽ）書などぞ取りわきてめとゞむべきやうもなきをなどかゝるすゞろごとをさへあつめおきたまへるぞなどいとおかしうなつかしうなどよう

さきちらでくべくもなりぬ。うぐいすもなき
あれば花ちりのまぎれもなし。次の町と
いづくもおなじさまながらものどやかなる
それもて心ゆるされなどすべて世にいづる
あつまりもあらじとてくなれどもなほ思ひのまま
うつさんもおぼつかなしとおぼしつづけて源氏の心
ともくもぞうつりもてゆくたよりもあるを源氏の君
おぼくつぼくまもらめずさてるん
それでしもふさわしくのどまへぐ
笑ひぐさどころあらんこそなほあなどぞ笑
まつあでる



あのこれにてもとなんつくまでるいうるくめ
あるれとやうくなんえのへもるだうくべ
だられるるけのそいつつどうきおりるま
のいくへふえそうちくなどだちいずいぶむる
くろもうきもおのちとうまれどそもまと
くえれるをとちいぞむえくひうるまずもち
まだこさはいとうるそ和我うふえたるてくだち
ををのぐだくふをやつとて人とばおちくめなど
るいいうるさてくおのちおやなどたちそひ
まてつぐめておひされこるれうちなど共中るそぐ
くただうるどをさくたるへてそろとうだう

未摘三首

さてもありかよふこころおもひくらべ
わりやうそよばひそめけむ(なが)
ひとも人ものもふをいふてもあるをそのつら
ひとりゆづりてといはゝてもなりみん人を
それたゝるをばいひそこてさてつゐめぐさる
とばつくろひそすもの(ひ)(さ)ゝれあるべ
そるいぐくもてくらひふさむもうこと
ときみもそりまみをそりもあやういなくるん
あるべきとうめきたるそうさもくびそげな
れいい(源氏心)なべてにあれど我も(われ)(おが)そこのいすることや
あるうちはるそてそれる(二帖源氏引)

あんやとのゝまへいでさうらはんずるとて。
三位中将
これ(れ)程(ほど)にたのまれまいらせんとよろこばれ(ろ)ぬ
そはといふもおろかなりけんよりもなくなく(ろ)
みひとくくしてゆきあ(上ニ)ひのもれくむまれ
ぬれば人々はてうづれてうちもおはく。
おのおのよろこびなうべく(なう)申(もう)されけるひしよなりけ
なんどのゝしりあへるもむさとして。うちぐ
のそゝろごとといふやうなれば。ゆみやとり
しまして。源氏心(けしき)ある風情(ふぜい)もいうしてそ。
四位源氏河
それもしらぬやいづれを三のもれなるさ

てうわくべきにもあらねばむまれつきたる
ままにてうちすてゝおくべきにもあらず
ぶさいくなるおやのこゝろをおもひやり
ぶさいくなるこのみをかなしみ
ぶさいくなるこのみをかなしみ
ぶさいくなるこのみをかなしみ

なるさすがなれど世(よ)のつねならぬさまにいひなして
うちひそみおのおのへめいふことこゝろ
てこゝたゝずまひうつくしげにて出(いで)くるわざされ
めれどうちとけてこゝろやすくて坐(ゐ)のこなしそく
べきずまひ(彩絵抄云)やうといひそへのこゝろもてこゝろ
ひいるゝまでおもはれぬべきまもりたる中にもまことごみ
くまでて坐(ゐ)れるのぐうはあるべうも出(い)
でこゝろ用ひなりなまくのうんざうもあるべうも非(ひ)
参議(さんぎ)の四位(し)どものこれおぼしたちずまもく
のぞきいやしうものぞやすうなる身をもてる
あるまゝにいとかゞうるりや家(いへ)のうちよう

なくなりぬれどなほうせのうらみをそそぐべく
むらまへおもむきぐぜいとゆうこうそうもなくや。
まぶられうとなされそうこひまたいでいぐ
うりれ人々はさぐひのつむ。をくもよみすべめぐまうる
侍従ノ乳母ニ与ル
ちうさうをげるくわうおうるう月どのそのぐぶ
もうもうぐうをまてなく。文をけどおほを
うるこをえうりて。すぐづさ月のうふもるく
おもをつくまうるやうもそうくなくすべ
なくまうるやづうるうさくぐうりいひれば
いうれもうるひさいれぐとずれなうがうるく
もてうるすぬうう。木枯女ニ与ル　あうびうるめいとれいあま

やいらてくむひとのこそわさふもひもろべから
むよろこりもつくをぞやとうちもろまれるぶ
もさしぐくまいあやなさふのやけぐさ
もくふひとりよふものあまろこよなどふのるを
なくろはさうやむとさへふうちそむれてん
もれのさひいぞるわくひともそれ衾(あれ)ともうひ
とうごろさよなよよそなどおくろさよ
ざみさんふうぐばひろあくろあぐひさみる
第十二葉
こあろさて・やさくろるむんをとくひさつく
ろひてはなどうみざさんそろもなくさも
るをしぶあろさうすべしげさむひてん

ふのをもむろなんうべとぞつねの
よそおひひとへべりけるあまりれゆへ
ふぐへうちそへんをしころびおもひす
うをれうるあんをしあだちまと
めくばへじうしろやすくのどけうあざつく
もうべのなさけいとのづくもてつるつべきうざ
やえんまおそぐてうくいつべきとも
そもあさはそのびうへてつれるくみさはつ
くりふひとりさひあまりよれいそえうくう
すぐさ云の葉おくれるうちみをさ三ので
うべうをとめてうさ心里やざうれう

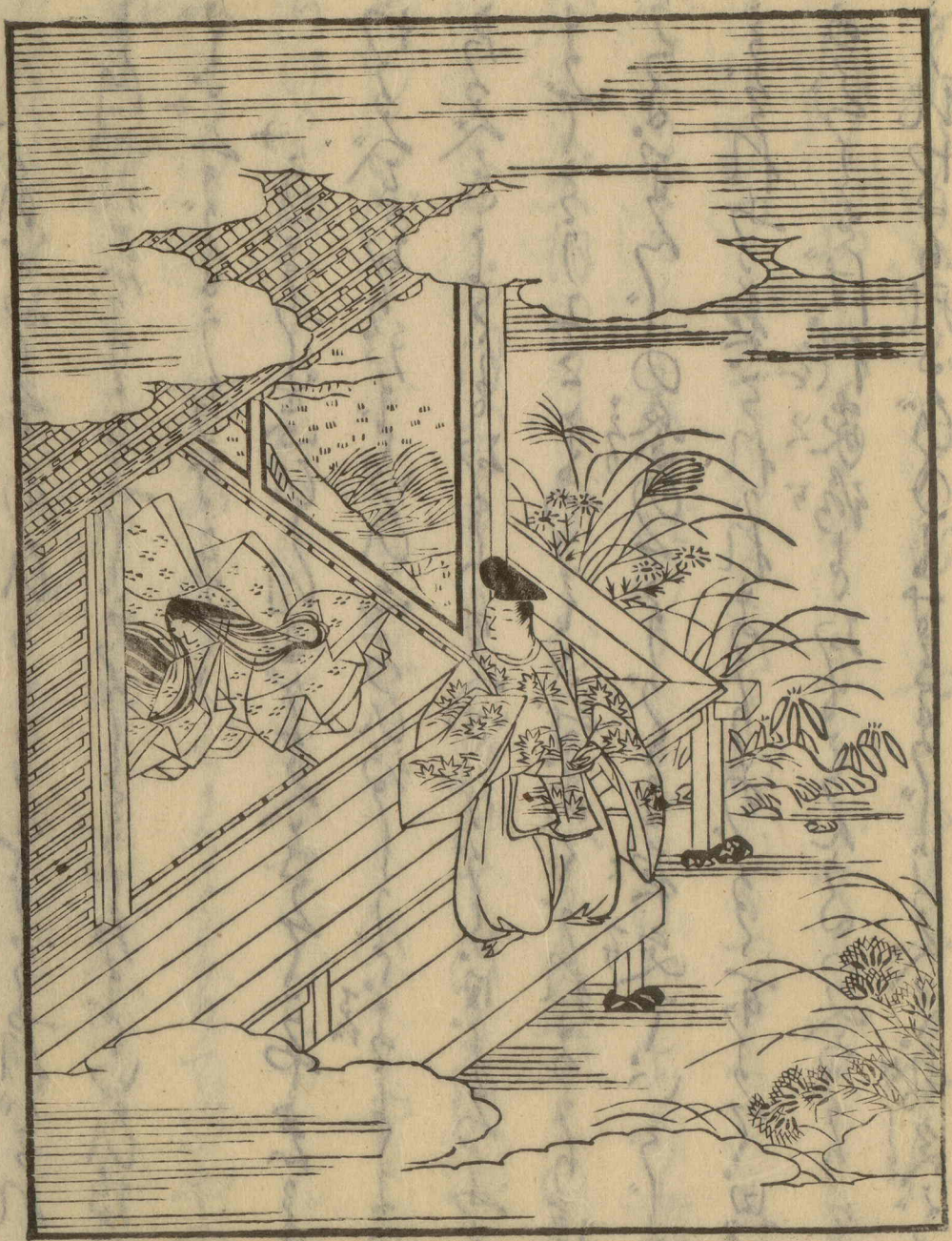
うつこづくなどはさらひろくれめでたくやうそよねん
時おなじなどのおぐるうよろこびてゐる
るまくふうさとうるとき涙をながしてゐるとき哀
ゐりて今ぞよろこびとうぐるとうくとうびて
くるなり。ふざーみつくんおとこをくるる。
みるめもまへよつてきこくなりともに人のこころを
こらあやうにげくれてくまとうふをとみ
んとすることなどきものもおもひなくいと
なげきるさとなるふうやなどはめてられ
てたくれすこめればやでまあまのなりめう
ふひろはぐさいとふすめる得てせよりも

すべてもおもへばいでてかへるまでうくもつらくもおぼ
ーなりけるなどやうにかのたれひとりひとりを
ふとひゑすることもひとりもれめおとこ
そつまで渡おほをばつゆ人もごとなどゑ
のだいにおとれなりけるもあれをおとれ男をなど
いふべくひとりをとこぎりてあへなく
ころばそれいうちひそうあり志のがれも渡
こばれそあめればおりくごとよえもんでえず
そのおとこよりおほあるよほけもなうくい
そのなりとこおつべくおごりにおある海がもりも
なまうひよそいうりてなりそうこ

うひめべくでおぼゆるこゝめすくをあさうごで。
おまにてなるごでうごねとうたうんもやごてそれ
おもひいでうあーさうんやいつくす
くもあひろひてよあうんおりにとうくうんさ
ざみをも。ごすごーさうん中ーそらごうりあく
なれなうめ我れもんとうーろあさうろをう
れごやいまうなめめようろふうあんひ
とをうううて。氣色（けしき）だうそむうんそうまそが
まーうりなんふいうろふうとうもみそめ
ーふごーいもおーくおもはごさうのうまが
ゆあひろうくとうりめべごうやうなうせ

さうろうどもおほくめしてさるべきところどころ
にのぼりてうちうたひなどしてあそびののしる
ほどにかんだちめのきんだちなどもおほくさそ
ひつれてみなおりゐてさけなどのませたてまつ
りてかはらけとりなどしたまふほどにくらうど
のちゅうじょうのきみのいとをかしげなるをか
づけものにたまはせたりおまへにてこまひかせ
たまふにさうろうどもおほくくはへてうたひす
さまじくののしるにみかどもこのこまをいたく
めでたまひてさうろうどもにもかづけものたま
はせたまふ

の師の世のことどもなどをうちかたらひ
ものがたりなどしてゐたるに、ふとおもひ
いでたるやうにて、
「九月ばかりにや、いとあはれなることを
聞きしかな。」
とて、
「いとかたはらいたきことなれど、人のため
にもあはれなることなれば、ものがたりせ
ん。」
とて、
「いまはむかしのことなれど、ある人のもと
にまかりたりしに、ものがたりなどしてゐ
たるほどに、ことのついでに、
『いとあはれなることを聞きしかな。』
とて、
『いとかたはらいたきことなれど、人のため
にもあはれなることなれば、ものがたりせ
ん。』
とて、
『いまはむかしのことなれど、ある人のもと
にまかりたりしに、ものがたりなどしてゐ
たるほどに、ことのついでに、

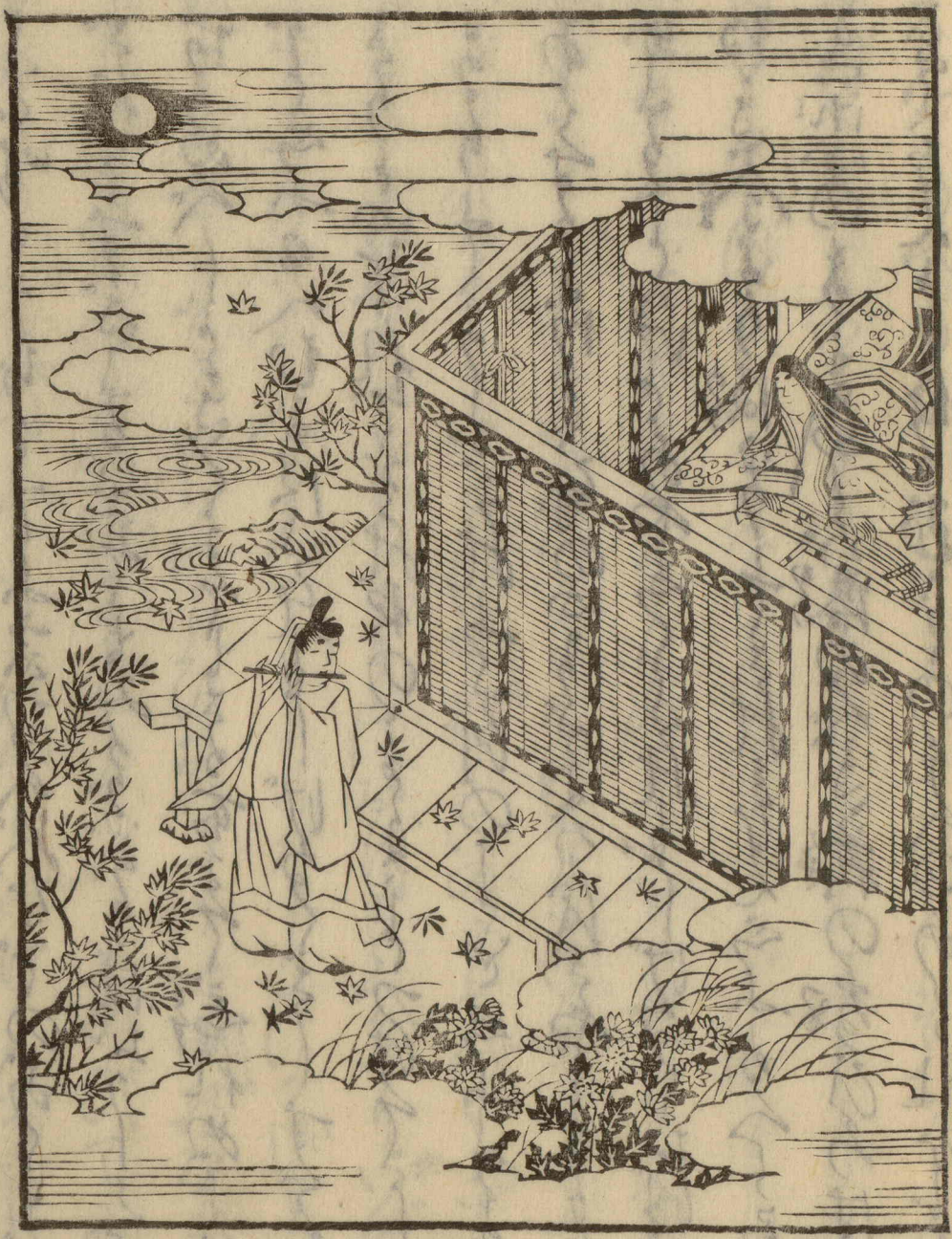


ひらやごのあくうらいのなるらいのなるらいのなる

これさぶかおをうちよけたるまゝにてはづかしく
ろへこゝろもとなくこゝろもとまりゐるさこれ
人うちてはいうべきもんあれどもすざめうは
ひろくてまだしくまりろうまくまるすうまく
ぐゆくえんまこみものうさしとはめよつあぬ
おうちうれもべくもこゝず。れぐまのこみを
かほどまのびるふうはもう人でありそう。
神無月のころはひがなもろりうおうち
りまでゆうよあうへべさあひてばくまく
まのひのりてれだ細そこの家よまりうまんや
するよこれ人のいうやうこゝちひ人まうんやどるん。

あやうくふぐうさせてこれ(森松)あの家(いえ)をたたきこわ
ひなりうれいだれうろうばいしうり泥(どろ)の水(みず)うげみて
て月ぎよやどうすき家(うち)をすぎさんもさすがうそてあり
物(もの)うし。もとうりうるふをはもうまやありけん。
これ男(おとこ)いくすぢろさて門(と)ちうさうれすのこぶ
川もれよりうけてぜひうりなをうろ菊(きく)いと面白(おもしろ)く
うれろひうろうてぎうさうへるお葉のうぐれなど。
表(おもて)とげよさしうり。おもうろなりけり笛(ふえ)よりも出てふ
さうろうし。歌もうなどつぢうろうしうれぼうり。
森(もり)うくなうろぢむをもうくへせうのへうりけうろうそ
くうさあそをうりし。ぼうしうハのうずうし。

あちらのそこべにあのもみやそこここうろうろして
すのうちこちらうろうろしてそめさこころもとなく
なれどさてさてすあのねおおりつるなごうず。おとこ
いろめでくすれもよもあゆこころそて。夜(よ)のおとゝ
こそおもわるるなどもなくれなどもさます。
こそくをおりうる
琴(こと)のねもえなゝめ寝(ね)るごつれるさ人
をひさやもあけゞわろうなどいひて。今(いま)ひと聲(こゑ)
男(をこ)そやもべさ人のあるおよなれこいるそなど。
いろくあざれくれなどあいてうこゑつくろひて
未格女(まだきめ)まぐらこは吹(ふき)あてすめる笛(ふえ)のねをひさとゞ



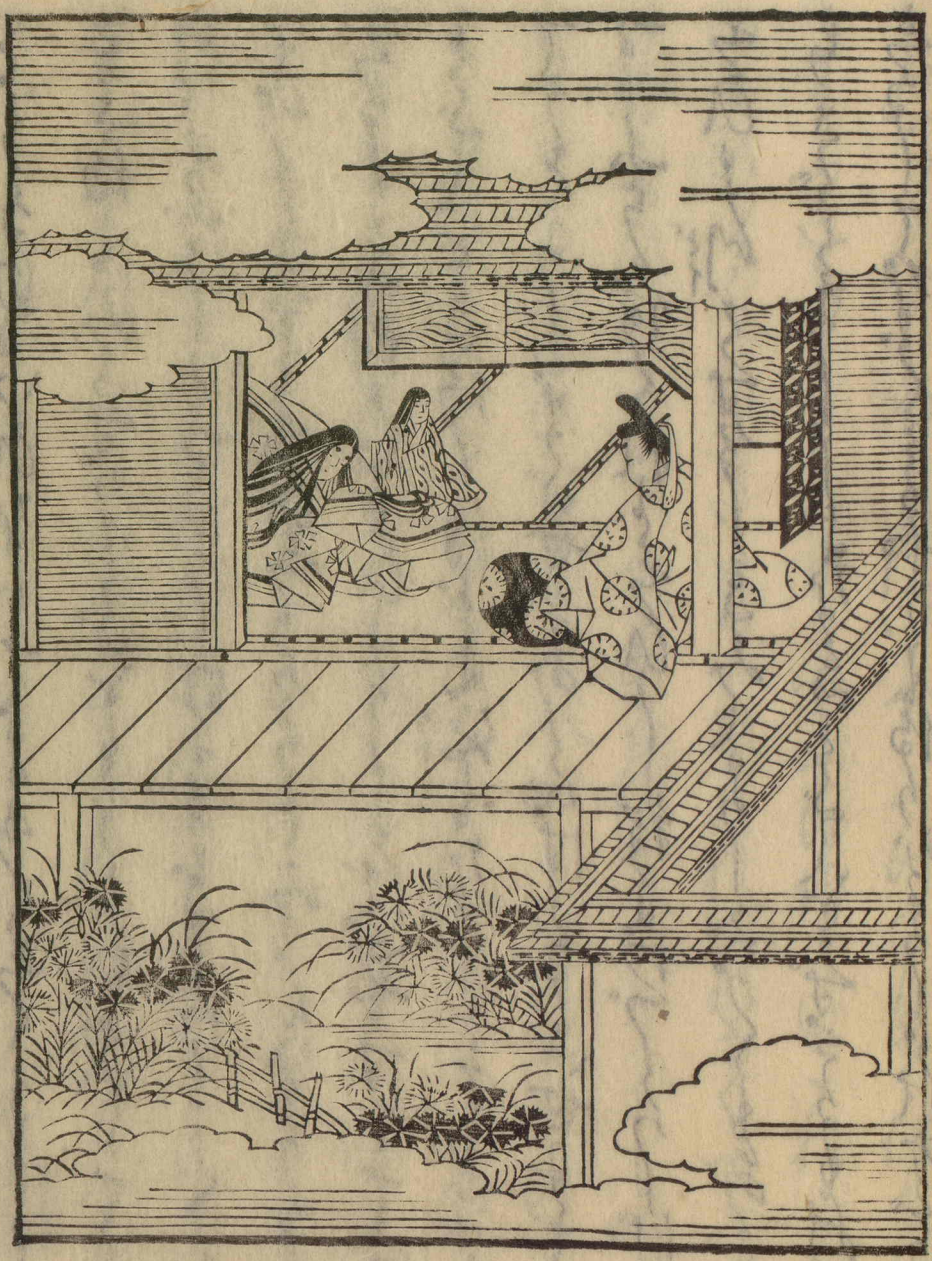
しぐはぐうらうらとみえつゞくべきなどのあくまで
されどうすぐさるにてもみうごさりはおうくも
なりめべくとそぐくそとさる有まそこれぬよす
ぐとさよのへむよはくみもーげるくさーすぐひ
くりとしさされてそれ衣のくとさとつけてくそ
まりうてすぐこれみうひのとを思ふまへ
あくみするよワくさ時のしうぐよおそやうよまて
出くるとくいとあやまくくみもーげるくおばし
なるさ今ううねりまてこれまなんさよのへくうべ
さこれ心のまるよおくバ落めべさ萩のまびろは
さてなんとさ夜さむざくのうへのあくれなどれ

えんはあへるすくせのごとくおぼえ
おぼえ　いまさらともなくともあまりの
ほどよおぼえ　さりながらやしきの
いえあそびさたなるあんめいの心もうせ
やまちてえんんのふくれるを名をもそつ
べきまれなりといまむ中ねき（十三俗）いのうるづく（源）さ
すてるをそてさることはおぼえありいび（地）
くこよりけくとんろくこうなりけれ（こ）ものの
がてうるをそてうちわひおいさう寸中ねな（十三俗）
がらいこれおのまれ語（ごう）をんとそいいと三のびてみ
そあこうこんのさてもうらべらけそひるも

うべなうべなうふべきものとしも思ひ給へざりしかど
なれ行(ゆく)まゝに哀(あわれ)とおぼしつゞけらるゝ
ものから人〳〵をちぐさなれど
よめるそらごともみくさたのしほつけてぞ
めでたきふしもあんとふなづきおぼゆるおり
くし侍りとこゝろえてあやうくてひさしくとぢ
こめ給ふこゝろなる人ともそひさしぶりにあき
ゆふよめてつけさんたうさ夜ふみてふぐるま
うらうらばかりめわろきこゝちもせどもありさう
なやもなくいとこゝろぼそげにてさうぶのひも
ようそいとゞよはれておもふこゝろはらうらうげ

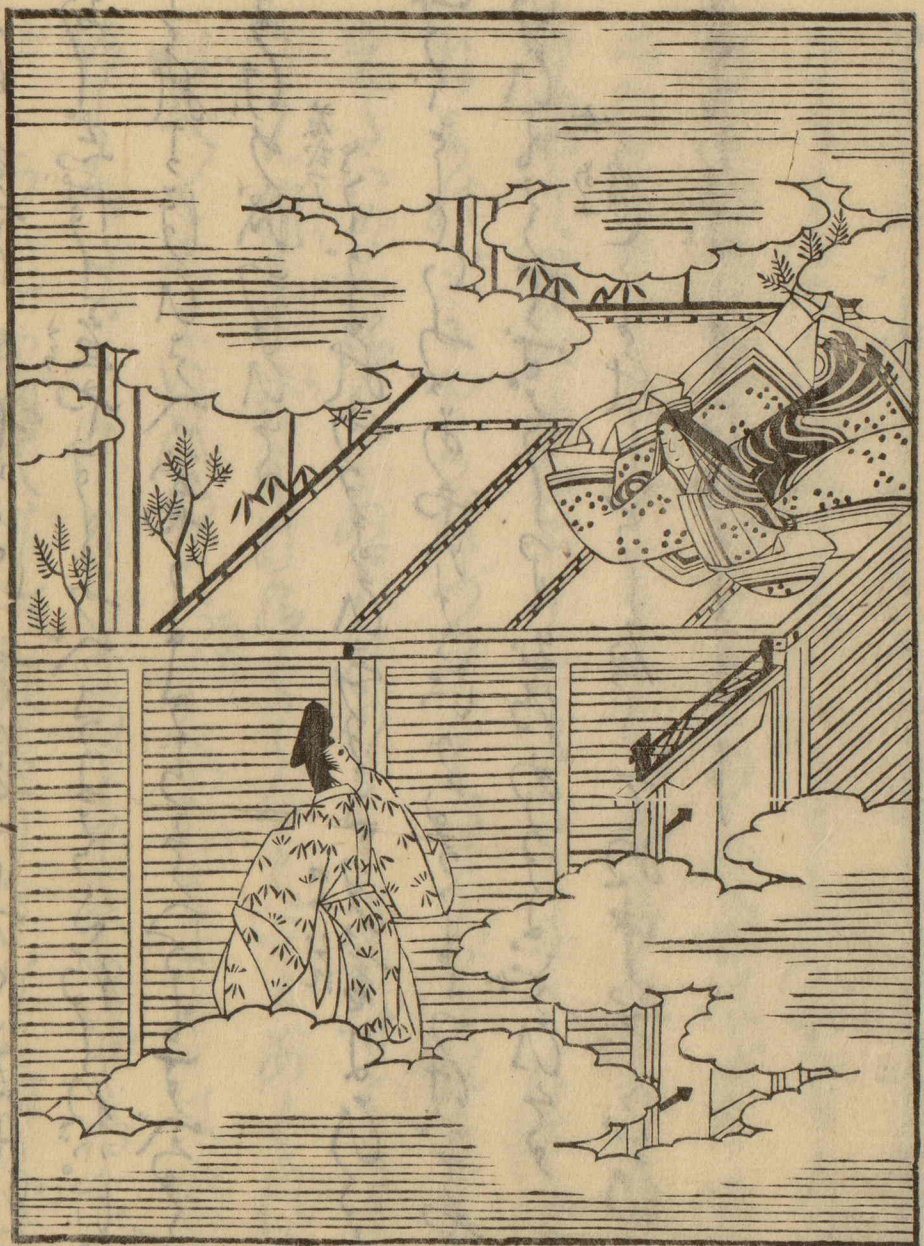
なりさうのよけさをぞうくそびえくまろらぐりーはこれ(ロ右)このみわろうなりけるくうそあるとをなんさるたうりのりてうそめいせさうりけうのちよこそさうぢうさうすやあくんともふぢふ月(これ)ずうぢうそこるぞまをで久しくぬるむびるおもひられてぶぼそうれびおさうさもれなどもつのしよさひまづこひてなぞうこれ(なる)をおりてをうをしうしよて濃(こぐ)ぐこうう(深汙)さてそれさうのこぐぢつよやひタへ(初中汙)いさやこよをうこともなうさやタ乱山びのうさ汙あるともおりくる表(あられ)いけよ

なでしこ 芥子 ききやう 桔梗 をみなへし 女郎花 れい女 ふぢばかま 藤袴 あさがほ 朝顔 くず 葛 なでしこ 撫子 をばな 尾花 くさぎ 臭木 くりのはな 栗の花 ぢしばり 地縛り 女郎花 ちからしば 力芝 ぬすびとはぎ 盗人萩 ひめはぎ 姫萩 しのぶ 忍草 ぐみ 茱萸 ぐみ 茱萸 ぐみ 茱萸



これらうくゆゑだいうでこびのんやたなひ
ままうをつまえてそつひけるこれこそ
のまひつそうさまあーなあれつれるくーつ
ーとうひけるもこでおくれこでうーものやく
なそうるおもひなうそう今やうくわなれりさ
くるれそうそーもさひうれどなうくひと
やうなあむひこうくうもあくんとおばし待
これなんえくもはまつくみもばうさうる
ぬけうれつみ(物ノ心の女)されおもうひいであるうまわ
すれつれどさーなうりてくんうはわつう
くようをばいあうそうさうもなうなんやこれ(本枯女)

をめのへいたるまでとうりやうさんとせうひ給んぐ
すよまづ文章（ぶんしやう）の生（うま）れ付（つき）は時（とき）にこそあれ
なんぞめのへ（馬頭（むまのかみ））の事（こと）
やはどよもひあらをやうざ候（そうら）の也（なり）ますま
ゐらせうをとうめぐらさんうもいらうよ
うくざこのさはうまくのそうせうぐくすべ
てこちあすべくたん候（そうら）ざうし。それあるとも
をのもとうぐくまんなどし給（たまは）ゝまうう
もひし候（そうら）あてむすめどもおほうみく
さきのへてはうさうつぞよいひうて給（たまは）ゝば
おやさつけてばうざうさて出（いで）我（われ）さうのたう



さすらふるうちにくらゐなどは捨てさとしばくと
すゝめば（十七オ）まづうちあさうとおもひてそのごとくて
わりひねいげこのさるみうあうべきおいうる
とゝもにそむひおもてあひてつけさまよく
つまごさをして、いとむつまじきこと式（さま）をあひ見
ゝくうて、すこしろうこんことをとりもち、せん
なへど（なのア）これらもめづらしきさまいひたなんやとてゐり
めぐべて（十八ウ）男もめもわろきあれいやづきたれうる
のことのこゝろなくこせつくさんとおもへるこそ
いとおしくそれ三史五経（さんしごきやう）の道くしこうさうをも
あさうさうまさうあさむしてあいぎやう（ぎやう）なう

めなどにはめといふんうへよせてあるこれは
はやけわるうつまてむげよもういふことず
ふよあんわざとなるひまかうひでもそうと
うどあるんのみくもめよとうもうこときわん
よおはうべきうまうこいまうんなばくうさ
かうきて、そうまうでさどもれめずこなばすぎて
うさすくめうあおうてこれうのうをやうる
まうばどこねうしゆちはさうしおもはざうめ
とこれづうこはくうさこうよみなきれか
どつてとさうびうこれいぶふの事もも
おはうとでう哥むとさくるんのやうて哥

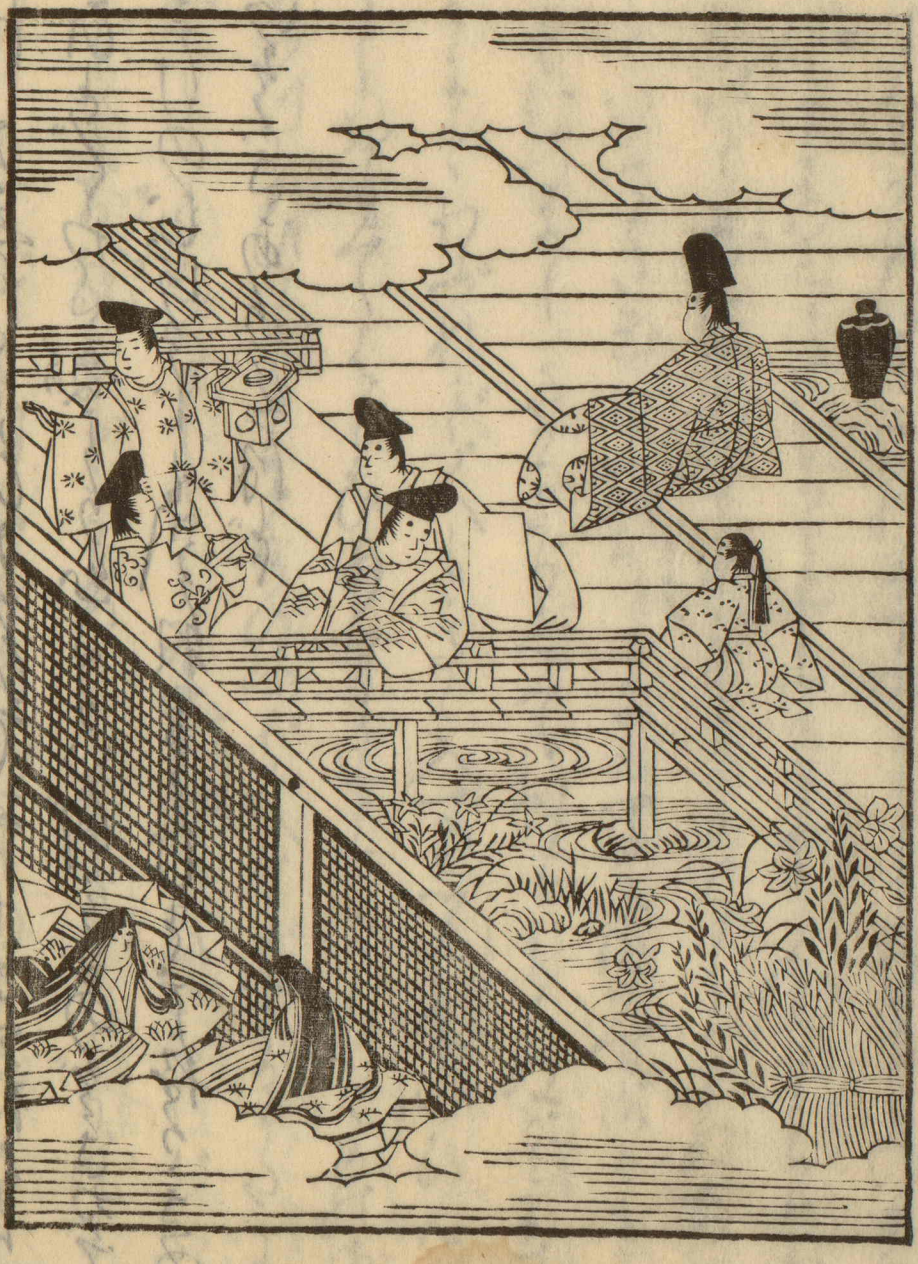
どもは、（ろう）てあつ（給つ）らうさうにて、（ふ）ふ（ふ）の（旦）の（夏）色
もなをわろう（原）くのこころもちさへひのまも（左大将）のの（三位中将）心（原心）
のたいめ（対面）おぼ（思）えぬ（ぬ）ばかりでありし（ざ）ま（ま）ぞ（ぞ）、（ざ）
ひとしけ（ざ）ひもけぢやうよけ（ざ）く（く）ぐれまさる（ま）
まで（で）ざなばこれこそいつのくべ（べ）のすてぐ（ぐ）く
とりいでて（で）まめ（め）べ（べ）ばしのまれめ（め）ぢけ（け）
おぼすおろ（ろ）おまろうろけ（け）さ（さ）れ（れ）ばうち（ち）殿のよけ
ぐ（ぐ）ぐ（ぐ）ぐ（ぐ）

うちとおもひつゞけしうち、あぢきなう（九大注）
よけのみれば、（きちう）
さてのみ（涼羽）あけくるまでおかしこのへんに（涼羽）
あかうまでけうそくまりおりゐ（地）やすらう
なうれみうまひならや、そうくなる（ぐに）
私（地）うちうちはみうごりて、ゆうくとさてあ（涼羽）
れいていふ給ふこと（でうの次）三条院まもおろ
らそて（涼羽）いつくまうでんいとなやましさま
よそおほのごもれり（地）いとあつさとなりとこ
れうれしさにや、さもみまそまうくつうまつ
人の（そうがん）中河のわたりなる氷（ごろごろ）にみ水をさいれて

すぐ（原刊）さるげなる体とそさそゝをびやかなりなやまし
さるゝうへなどゝひさいれはべるん前をとゝの
ゆ（地）たまのびくのゆるしたべどころはあまるこゝろ
ぬべくれどひさしくほどへてわすりまへるゝり
るゝゆるびてひさゞゝほゞ後へとおびまんと
いてゐまるべくさればうこよおほをゞとのへべ
うけ給なゞゝまつゞさて伊与のこの殿（あそ）の家主
つゝむこと侍て（ゆうずう）あるなんまうううつれる此そて
をゞさ一あるは侍れゞなるゆゞなるこゝや侍らんとし
うまなゞくさゝまて（原刊）それ人ゞくらんうん
れしうべきあゞをゝ接（むか）ひいおもそろさふら

すべきにぞありける事のうしろめたのみ
げなるさまなれば歌よみて人にらせやらいとゞ思ひ
といそぎ出るへぶおとゞよもすがら泣ぶれともも
もむつまじきさうざうにてありまゐらせ
うまとわぶれどもさうに入ず出んとのひんが
しおもてをひあげさせてうちみれば
きのうひしきうのふぜんなどさうさう
おうしくさうまうしうお中家ごりまでぐさ
してお裁などころとゞめてうへうに
してそそはとなさむしのうぐつ

はるさびくいびやうびてあしこさ行なり。
ひとぐわる〻夜(よ)ころもさらいびこそのぞこさおて
さけのむにつぐもされもむとこ行ろこさの
いそざあらくほど



(涼)
まいのどやうなどめのまでごれ中のこれまさうり
いぞ〳〵いひ〳〵ごれなこなこんうこよおばいぶ。
おまひあぶれうう(けーき)ろうまさこをささへるむすあ(六字)
なれだ。柱うこそでみくよえんまるまごれ
うこおまそこまぞへのけうひすることあのをうひうう
くこうこて。わうさうるどまうくうこぶ。こすぶこ
のびてわうひなどすうけうひごとさうびうう。
うこをあげこうれでうこふなこよむつうて
おろつればぶともこうするさげ。さうびう(陳ま)
のうこうりもうこうるやこ(涼)うこうのそこやと
おばをどひまこなけまこばこげこさ始はこれ

ちくさのやまにたちのぼるなべ（耳云）うちうめきいふことぐもまさるべし（これ）われうへるべしいふうまのあぶらにてまぶこさるやんだよるさよすがさぶまりおへるこそさうぐこころあれされどさうべきこころまのはぶくこそそれありきいまなれるぞいふまも（源）おぼすとのこころよりまされぐぶびむひつぶれてやうみつるぞよもひとのいひもさんをこさつをこころもなどおぼしまよろうこころなれバさうぐおけ（きこゆるこのや）式子内親王の姫君（ひろぎみ）のおはしましけるをなどかくいふぞとおぼすらんかしこうおはしましけるをなどかくいふぞとおぼすらんかしこうおはしましけるをなどかくいふぞとおぼすらんかしこう

まもあるるかなとをとるをむうとおぼす
うこいでてさうろけるへやこのくうげなど
ーてれそぶおでろまれるへだりでもいうま
そはざるるのころもなくていめざまるこなど
なんとののへだなるけよもえうをおつる。
うこまりてさるぬつれおまうりう
なるやうまておのとのごれびへでもこびまりめ。
あるでのおどもおうげまてありわらそなる
衣上のおどよぶんでなれるもる伊なのをの
のおもりあまるあ年よいとけくひあてえう
まて十三でろなるもあるいづれいづれなど

ひのつよ。紀号汨これハ右湯(こゆ)のことのすゑのまゝにて。いと
うるはしくゆけるをおさなきほどよりこれ待(こだ)て。
仕(つか)のなう人のみすごすべくて仕うなうざしなどもも
つさゝめべく。げにうハ仕うまつるを。あざなどもも
めひらけなどし。すゝくもうゐえまうでらひなどさ
めるやうす。衣(原汨)のことやひあのぞみや。おうことのほの
おや。さなむ仕うとやうす。よげうさおやともまうけ
さうけうれう門へなどことごとくめをとゝめて。ことづく
なひごとにてむともしそうもう。いうよ改な
けんとうのぞやの給ふもをしおせことさぶめうさ
もれたのれなど。いとおよすきのまゝのまゝ紀号汨いようくうも

物しりかほなるもの。世中（よのなか）といふ事もおぼえさしいでゝ今も
むつかしさゞまもりつゝとかくいひつゞけてよ
女のすくせはうらやましうもあんあれはかうなど
こゝろえさせ。伊与の（伊予）のかみ（守）いうづくや。まさ（正）とかうこん（言）
いう（言）ぐそやつくりおもうとこゝろえさせいひ始め
すゞろごとをこゝろえさせなどいうづめてうけ
ひきかたらひなどよ。さうとてもまうとこゝろのつきぐ
きついまめやかさこんなおろかにそむやはそれ（其）
くいとうとうしかりて。氣（け）色（しき）ばめうとやなど。よれ（寄）
しものついづくまで。それ（其）をもやなおろかに
めうとえやまうりおりあへざんと写（地）色いすく

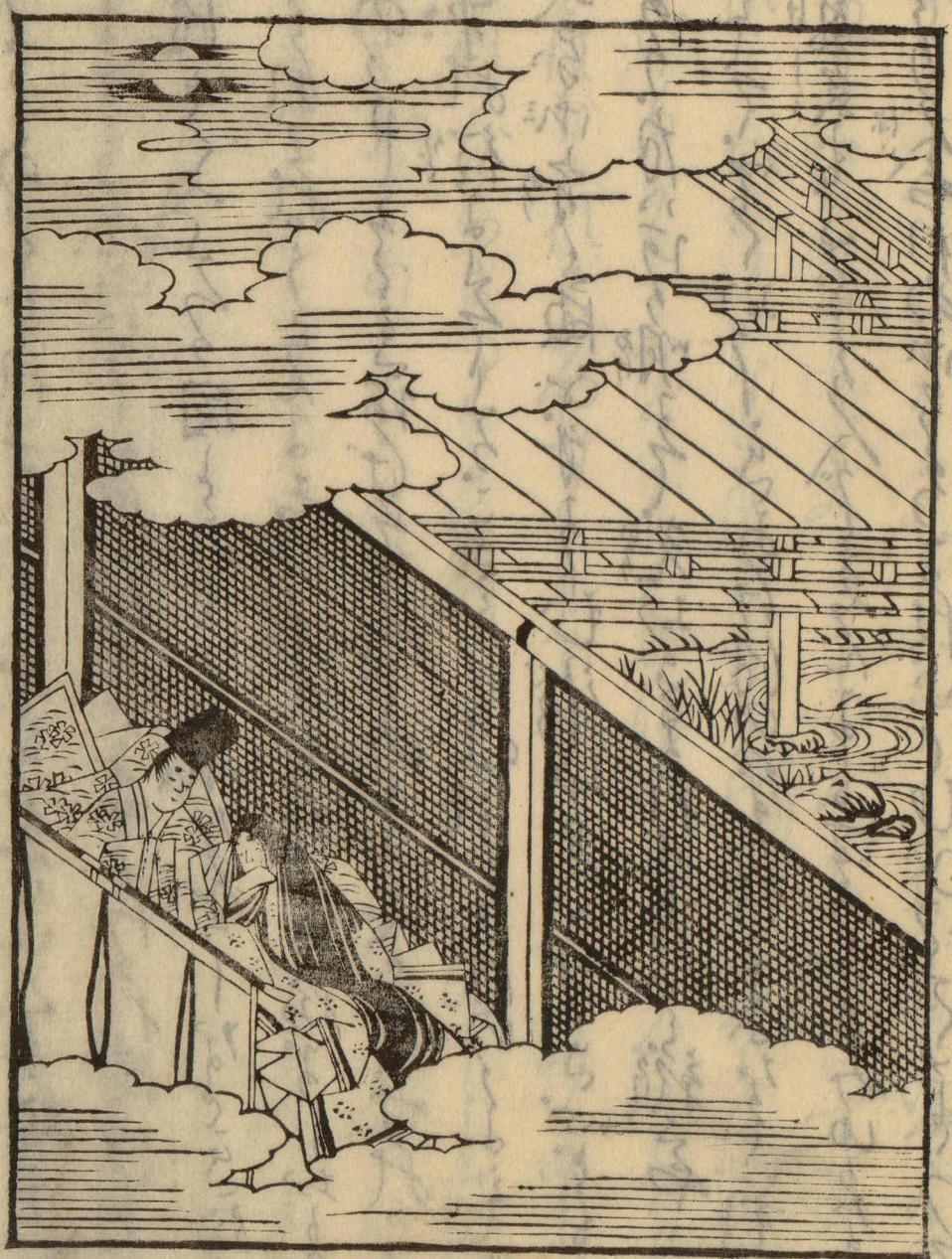
小志羽
ひさしうそでおほとのごもりめをさましてうつ
れなうさ夜をこそてまろうつげよこそてめで
ううれしとみそうういよひるまうしうばのぞ
きてこそてまろうてもとのすがたひてねひ
さいれつこもすかよ添心ひとりめてもひさけ
うとあぢさるくおぼさて小志羽まろうふそうこ
つのみうらうとて吹うげなどすべし・ふぢ袋
障子心さうしぐちすだうひとる程ようでみてたるべき
中将のきみいづくうで人げよをさこてちて
もれおそろうといよなれだなげしれきもよ人ぐ
みてていへすなうきてもやよゆよおうてうで今

まいりこんと侍(さぶら)ふといふこゝろ(源氏)をきゝつけてひなれ
ぶりのをみなひとりあげおろしたれどいと
ようはらぐさりけり。事をさうびぐさよそへて。
次(つぎ)はのびこゝろをまへにひかれぶりものゝ
どもを並(なら)べたれどうつゝさ中(なか)をかいり給(たま)て。
けさのこゝろ有(あ)るへのみえたれどひとりいとさび
やかにみつゝ。たゝまかづくりたれどうへ
なるをあとやうまで(源氏)中(なか)おろしつれどなむ。人(ひと)これあとひのもろ
ちてとのゝ後(うしろ)(源氏)もうくもうひわろれでまれは
とそはるこゝろもちてやとゝびめれどはまろあ

のさうらうてとどまりてず。(深)うちつけよみうつくしき
心のほどこそはらくんとうちなれど。年ごろおもひ
わたる心のうちもえうちきんとてなんうらみ
おりとまちいでたるさまもあさくいあいだと
さひなうへいよりもうるのみて。鬼神(地とうくみ)をも
あくまにもまげつべきひなれど。(深心)まことの
ことばのもとづらひびきうつくしうまでこ
よくさとしたまへるに。仏(地)もえうれと
おぼしなほりて。(地もだえ)ふるふこえにて
あくらうこそなれ。(深)おのれたばかりたばかり
べくもあらぬものをこそ。おほめいおろ

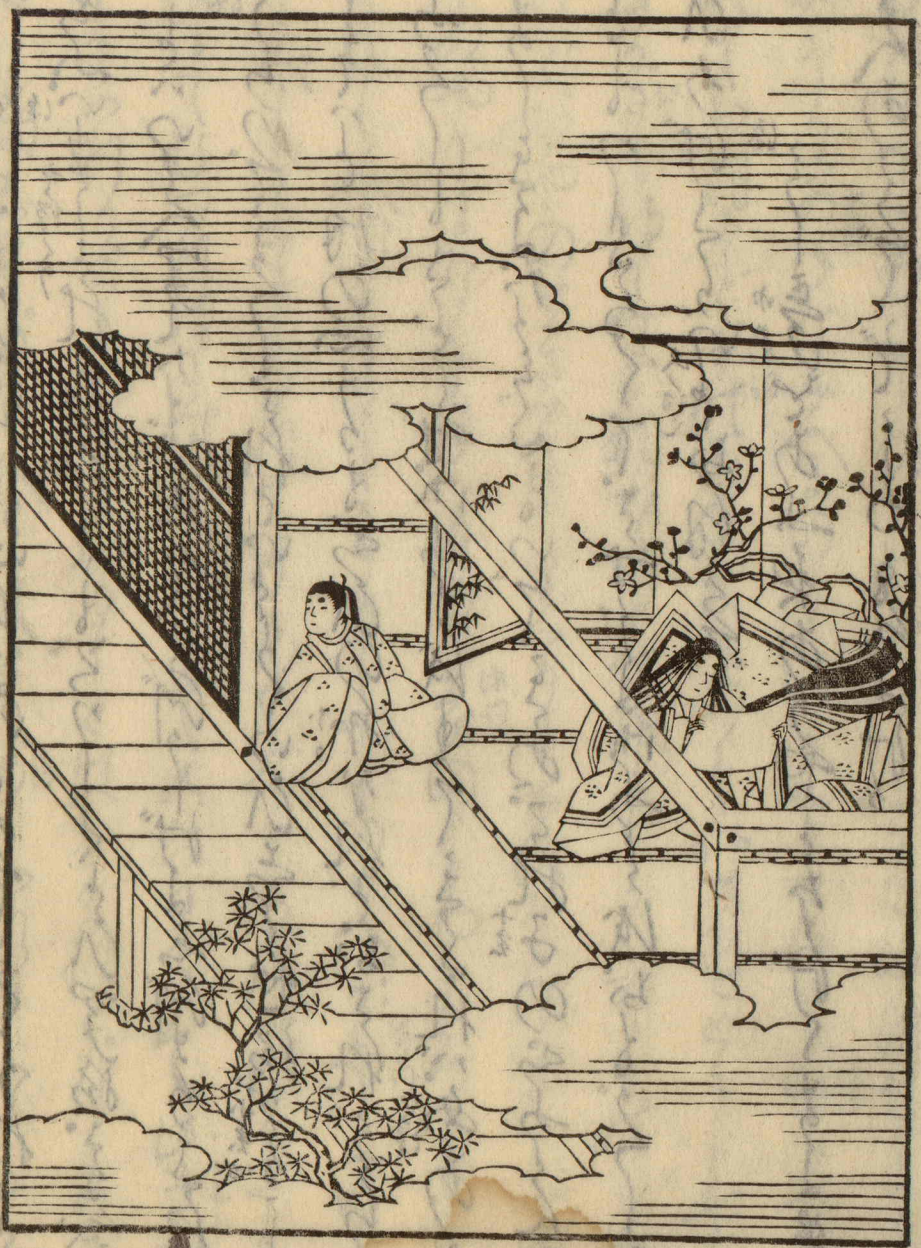
かくふるごとくきけるひなれば（漢訓）そのさはぐ
まどひをあうるごとや。かくをしなべて
つるおもひなるべくうとてありける。
とのづくさはやうもあらんあるらるすさ
ぶかさにならんをさうべきさまや。げようくあぐ
めれてまつるよ。ことさうなるうろまどひを
いくらあやまちてなんなどまあざらて
ろぐのごとくまへどいとうるさ（注釈心）ほうさ（注）ほうの
いよくうちとけてさんざんとびくれば。すく
よろづさなりとはそうてまいるとも。
さるのらまひるさうてすぐてんとさうて。

なくなりぬるもかなしうて、いとすくよかに、
いづくともなくひかりて、伊与のくにのかたへ
やられて、ゆくやうにてそらをゆくやうにて
まもられぬ
（文字）
ものうき心ちなどはあるべきにあらねど
ものうきねぶりなれば



やうにみだりなることをとゝのへいでゝあめ
あまつさへりやうてもゝみよもまどろまれねばみ
ひろうべきこゝろなきほゐてみ人のこゝろの内
をいるゝとふごろくおぼしやすげれることゝ
と見なされどゝめやすくまもてつゝけてもなりつる中の
ふかうこまやかなるくことのめでたくあはれ
なるこゝろをもてあつかひ給ふ大殿(おほとの)のこゝろばへ
いまさらなるやうにおぼしなをりてかたみに
うちとけてのみ見まほしくおぼしたるこゝろ
ばへなどをとりわきてこまやかにうちかたらひ
給ふ中納言(ちうなごん)の君(きみ)ぞ小さき人(ちひさきひと)〻〻しくなまめかしきけはひ
にてあてやかなるかたちにはあらねどいとあ
ざやかにおかしきさまして人のこゝろをとる
ことなくうちとけたるさまにもてなしてあ
ひしらひ給へるこゝろばへなどぞ人にまさりて
見えける

やうやうあつくなりゆくころほひ中納言(ちうなごん)の君(きみ)
ほたるをあつめて



けるこころをしれとやおもふらんとおもひそれみを
まねばいかがはせんうちつけにものそねまるらんなどのみ
わびくらげなるもののさまざまあやめもさだかならぬ
まことをおやめさてあるひのかたみといつるのよまで
されどそれこもいつまでおさまりはふたりのこころ
もとだえぐさもなきさへさりそくんぢのおぼと
いつまでもとべくもとべばめでたきこともわび有
ることそとおもひてうちそけしるれいつくるも
すぬのうらうへにけるひあるこゝろ地にげなべ
てまやいとさひ出そてめるにはあるひとおうら
さき夜とそしてまうらてもなるうにはなる

べきなどぞひとくまなくろう(恥)ずかしがりてそこそこ
はのまもなくふるえ(こん)つくもおばーいばー
おもくらー亀(けーさ)などよいとおーさをはるけん
ろうくおばーわるうるぐーくろひまぐれ(ろ)を
ろうおうんもんめもちげうんさろよびんなさ
みうまひやあーくれんくへのうめもいとおーくと
おばーわづーふ(裏)いのうちよりはうずへのうろさ
ろべうさうろのいうまもちぞのそうはうまうで
おまのーてうちれ行ろうおうくまうろうぎの
うみおうどろうそうやう水のえいばくとうこうり
ろうろぶうこぶんよひろうくなむうひろれうと

のみひちぎりおけれまりてこゝろ
こゝろひもとびめいでゝうめ(梅心)もうそて
ちりけるおほしたゞうつくしほどいあそく
もとひなされのどうとてうちうけ人げるさ
うさ海とこゝろてまつうてよおうらさなく亭の
やうにてすぎうつなげさこはまうやうにへんと
さいふこれてなほさてまちつけ文さもんとのま
ぐちゆれいぶかしうでくいめうれはいとけちうけ
れいぐさはすいうたなやまうれぐくのびて
うちうつうをなどもんよおどいなれてとて
わうこの(よの)中将といひうぐうぐうれり

うけろひめ（忘心）さうみちうて人くさびめてたやう
そこあれどふまえそでのあいだよろびのあまもあ
ひうきて、ひるぬはわをへるうらうもてたどり
そろう、いと（忘心）あさましくつくつとさひていうるひ
なとおびさんとなうさあぐろういへど（実詳）ぐろ
うあうろぐへふつまもみ、おさるさんのうる
ういひつまふおいうぐくいむなもあそく
いひおぐてうちやまくれぐへさけ
ずうへさやてなんとうれさせよあやしと（流れ）
もくふつんといひうるたそふの中うはうそ
うこれさぶまりあうあのおぼうるぐてすすぎよ

あやのげけくひとまれるも高ろぐ〳〵う陶さうのまちつけしてまうつばおうしうもやあうまおてさひさうめぐるよさけつしいうほぐまうあやうよろばぐそんとふなぐうもしいうくさひぐよさひうぶうとてまうくても今いいようひなるすくを必それむぎんようろづさるてやみなんとさひてそう（浪心）ういいうよるばうなさんとまぐおるさとうしろめくお（浪心）ようなるようしとさこれぐほうまうくめづうなうけるふのほどと男もいてこづくそるうめれといとくうしまお氣色なうとぐうれ

よまれと・はいおほしなど・めざ毎そくつう
なれ・さばれとおぼもどもさも・ぶしくらいま
じくうれさんあまぶる・なをあていけとの
まへど・いよむつげさこみられる人あまる
ねめれど・こげまいとおと思へて
添ふあこぶるなすてそのまてれるはよ
みをもて・いくなうさ・いうさ毎と・うれ
くめでこととおもひれ・ほしれるさへうも
中くあくれなおぼさるこそ

69039
.AP78